

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

人間にとって、リズムというもののほど広く感じ取られる現象は少ないのではないだろうか。文明が違っても、年齢や性別や個性が違っても、「リズム」と聞いて、それなりのイメージを抱けない人はいないはずである。リズムという言葉を知らない人でさえ、歩く時にはリズムカルに歩いているし、そのことを指摘されればただちに意味を理解するに違いない。舞踊や音楽に詳しくない人でも、それを見たり聞いたりすると何かが体の内部で弾むのを感じ、それがリズムだと教えられればただちに①コロコロく納得するだろう。

そして人がリズムと聞いて思い浮かべる現象は、見渡せば世界の隅々にまで満ち満ちている。水面に石を落とせば輪のように波がリズムカルに広がるし、時計の振り子も弾力的に反復する音を立てる。身体そのものも不随意的にリズムを刻んでおり、心拍や呼吸などの場合はそのリズムを随意的に大きくすることもできる。天球を仰げば月は満ち欠けを繰り返して、注意深く観察すれば、星の運動も脈動する秩序を感じさせる。

このリズムの感受性は人類の地域も歴史も超えて、いわゆる文明化の程度と関係なく共有されている。むしろ文字も持たない先史的な文明の方が、リズムの感受性を高度に発達させていると言えるかも知れない。太鼓の多様な拍節で信号を送り、縄の結び目の長短によって意味を伝えた先史人は、近代人より繊細なリズムの感覚を持っていたと想像される。宗教儀式や社交の②ゴラクを見ても、近代人よりも前近代的な部族の方が、舞踊のリズムをより重要視しているように見える。

同じことは個人の成長段階についても当てはまるようであって、リズムは成人にも、言葉や文字を知らない幼児にも共通して理解される。泣いている乳児を一定のリズムで揺ると笑いを取り戻すし、別のリズムで揺ると静かに寝入ることが知られている。成人も行進曲のリズムに活力を鼓舞され、電車の断続的な振動によって居眠りを誘われる。Aリズムは、人の生涯を貫く共通語であるのは疑いない。

リズムが共通語であるといえ、これは異なった共同体や文化の間でも互いをつなぐ強い力を備えている。初めて接する異文化のリズムであっても、それがリズムだということは誰にもただちに感じ取ることができる。文化は人の身に付いた③カンシチュウだから、それを異文化人が再現するのは容易ではないが、本気で努力さえすれば不可能ではない。ヒップ・ホップというのは、アフリカ由来のリズムだが、アメリカの黒人を仲立ちにして、今では世界中に愛好者が広がっている。

リズムはまた人間の感覚器官の違いをも超えていて、俗に五感と呼ばれる全ての感覚を通じて享受することができる。耳は音のリズムを聞き、目は点や線、さらに色彩の対比の間にリズムを感じ取る。皮膚も触感のリズムカルな刺激を感じ分けるし、心臓の鼓動のように、いわば内臓の触覚が直接に受容するリズムもある。何よりも全身の筋肉と骨格はリズムに敏感であって、多くの日常活動をリズムカルに行うことができる上、純粹にリズムを満喫するためだけの運動、他ならぬ舞踊に④ボットウすることもできる。

このことを裏返して言えば、リズムを受け取る特定の感覚器官、感性の種類はどこにも存在しないということになる。断定するのは早すぎるが、あえて言えばBリズムを受け取るのはこれまで知られたどの感覚でもなく、全く未知の新しい中枢だと考える他はなさそうである。もともと現代の脳科学や生理学によっても、リズムの中枢と呼ぶべき脳の部位や反射中枢は見つかっていないから、とりあえずここでは未知の中枢と名付けておくしかないだろう。もつと正確を期すなら中枢があるという推定も棚上げして、身体を新たに定義し直した上で、リズムを感受するのは身体の全体だと考えておくべきかもしれない。

例えばギターやピアノなど楽器を弾く人が、体のどこでリズムを感じているかを想像してみるがよい。当然、演奏者は指でリズムを奏でるわけだが、それが良いリズムを生んでいるかどうかを判断するのは、その人の指ではなく耳だろう。一体リズムは指にあるのか耳にあるのか、その両方にあるのだろうか。もちろん両方にあると言うのが一番簡単そうだが、少し考えてみれば両方と言えないほど融合して別のものになっている。その上、指は腕や肩はもとより腰や足に至る全身に支えられているし、耳もまた「脳天に響く」とか「腹に響く」という比喩(ひゆ)が示すように、全身で音を聞いている。どう考えても、全身の中でリズムが存在する場所を局限するのは難しそうである。いわゆる視覚的なリズム、空間的なリズムというものに目を転じると、このことは一層良く理解できる。点と線のつながり、色彩を帯びた面の配置は視覚を通じて受容されるが、物理的には動かないそれらの形態がそのままリズムを生むはずはない。思いつくべきは、日本庭園の飛び石がリズムミカルに見えるのは、人がその上を跳んで歩くからだという事実である。形が流れや弾みを感じさせるのは、第一には見る人がその形をなぞって⑤ガンキウを動かし、第二にはそれを描いた画家の運動を自分の体内で追体験するからだろう。形を見てリズムを感じる人は、自らも密かに身体を動かし、その運動感覚のリズムを味わっている^⑤と見る他はない。

俗に言う視覚的なリズムは、実は視覚と運動感覚のまさに中間にあると言えそうだが、このことは造形の中でも特に書道、文字を美しく書く芸術においてはつきりと見て取れる。この場合には、リズムの感受能力には感覚だけでなく知識も加わり、筆法や筆順、文字の並びの方向を知っていることが鑑賞の前提となる。漢字や仮名文字が特に典型的だが、ローマ字やアラビア文字においても、文字のリズムを味わうには、見る人が心の中で書いてみる^⑤ことが必須である。ここまで来ると、リズム感受の中核は、単に諸感覚の中間にあるというのみならず、知識をも含めた人間の総合能力の中にあるという事実が、予想され始めるのである。

(山崎正和『リズムの哲学ノート』による)

問一 傍線部①～⑤のカタカナの部分に漢字に改めなさい。(解答は楷書ではつきり書くこと。)

問二 傍線部A「リズムは、人の生涯を貫く共通語である」とあるが、その理由を四〇字以内で記述しなさい。(句読点なども一字と数える。)

問三 傍線部B「リズムを受け取るのはこれまで知られたどの感覚でもなく、全く未知の新しい中枢だと考える他はなさそうである」とあるが、筆者がそう考える根拠を一〇〇字以内で説明しなさい。(句読点なども一字と数える。)

問四 傍線部C「点と線のつながり、色彩を帯びた面の配置は視覚を通じて受容されるが、物理的には動かないそれらの形態がそのままリズムを生むはずはない。」とあるが、筆者はこの矛盾をどのように考えているか。六〇字以内で説明しなさい。(句読点なども一字と数える。)

問五 筆者の考える「リズム」について、あなたの意見や考えを二〇〇字以内で述べなさい。(句読点なども一字と数える。)

受験番号		氏名	
------	--	----	--

問

1

②

③

④

⑤

問

[illegible]

問三

[illegible]

